

# 閲覧履歴の共有による情報検索支援システムの提案

【 研究系卒研 ・ 制作系卒研 】

068013 石田 武久

(指導教員 速水 治夫 教授)

## 1 はじめに

現在、Web 上から目的の情報を入手する上で検索エンジンは欠かせないツールである。本研究では、選択した文字列が新しい検索語句または、その一部となる情報検索の流れを「調査プロセス」と定義する。その問題点は、同じ目的を持ったユーザであっても同じプロセスを辿らなければならない点である。

問題解決に向けて「同じ目的で検索を行なった先人は必ずいる」という分析から従来では、Web ブラウザにバラバラに記録されていた閲覧履歴を目的ごと閲覧順に管理する。これを利用して同じ目的を持った 2 人目以降のユーザの調査プロセスを短縮できるのではないかと着想した。

そこで、調査プロセス内の遷移情報を付与した閲覧履歴を共有する情報検索支援システムを提案する。

## 2 システム機能

本章では、本システムの主機能である閲覧履歴取得機能とナビゲーション情報の決定手法について述べる。

### 2.1 閲覧履歴取得機能

閲覧履歴の取得機能を Firefox の拡張機能として開発した。インストールを行うと Web ブラウザのステータスバーにアイコンが追加される。履歴登録を行うユーザは、これをクリックして表示されるメニューを利用して、有用だと思った Web ページのページ名・URL・検索語句・リンク文字列を閲覧順に 1 つずつ取得・サーバに送信する。

### 2.2 ナビゲーション情報の決定手法

ナビゲーション情報決定手法の流れ図を以下に示す。なお、「マーケティング戦略について詳しく知りたい」という調査目的を例にとって説明を行う。

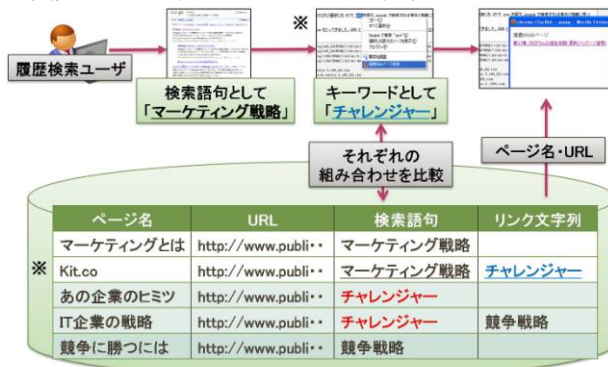


図 2.1 決定手法の流れ図

まず、履歴検索ユーザは、検索語句として「マーケティング戦略」と入力して検索を開始する。検索結果として得た Web ページの中からキーワードとして「チャレンジャー」を選択したとする。この検索語句と重要キーワードを、登録履歴の検索語句・リンク文字列と比較して同じの組み合わせであれば、登録履歴と同じ調査目的で当該 Web ページを訪れていると判定する。今回の例では図の※が付いた行がそれにあたる。

次にその行のリンク文字列に注目して、「チャレンジャー」が検索語句として利用されている行を探して、そのページ名・URL を返却する。ナビゲーション情報として推薦されるページ名は、リンクアンカーとなっております。クリックするとそのページにアクセスできる。

## 3 評価実験

ナビゲーション情報の有用性を確認するため、5 名の実験協力者に本システムの履歴検索を利用してもらい、評価を行なってもらった。

結果、検索結果であるナビゲーション情報には履歴検索ユーザが選択したキーワードに応じた情報が含まれていた。しかし、5 名中 2 名にしかナビゲーション機能を提示できなかった点から、非常に限定的な条件下でしか検索結果が得られないことがわかった。

## 4 おわりに

実験結果から、第 1 に検索語句の遷移の記録から調査目的の判定はできる。第 2 にキーワードに応じた情報が提示できる、という 2 点から本研究の手法で調査プロセスの短縮は可能といえる。しかし、現行システムでは、同一調査目的あたり 10 件程度の調査プロセスの登録が必要である。

## 参考文献

- [1] 江村秀之, 池田譲治, 下田洋志, 松澤太郎, dynamis : Firefox 3 HACKS—Mozilla テクノロジ徹底活用テクニック, p.137-157 株式会社オライリー・ジャパン (2008)
- [2] 中島伸介, 黒田慎介, 田中克己: 閲覧履歴を反映したコンテンツ依存型 Web ブックマーク, 情報処理学会誌: データベース, Vol.43, No.SIG 5 (TOD 14), pp.23-36 (2002.06)
- [3] 伊豆陸, 中島伸介, 田中克己: グループ支援型 Web 探索におけるナビゲーションのための既閲覧ページ群の同期化提示, 情報処理学会研究報告 データベース・システム研究会報告, Vol.71, pp.91-98 (2004.07)

